

2011. 11. 13. NPO法人 東三河自然観察会

2011年 定例観察会「都市公園の自然～豊橋公園の30年」第五回 参考資料

1. ケヤキ「豊橋公園の自然」（恒川敏雄著：昭和58年発行）（p. 80）

ケヤキはムク、エノキとともに公園の三大落葉樹であることは述べた。中でも一番高く、太くなるのがケヤキである。品位もまた高い。目通り四メートル以上の木はケヤキ以外は存しない。樹膚は白みを呈し若いほどすべすべして白く、紅葉は早く美しい。園地のケヤキも三十年以上たち、たくましくすこやかに生長しているが、老木の立ち枯れのあわれな姿があちこちに見えだした。葉もちぢれが目立ち健康葉は下枝では見られない。

昭和五十六年五月中旬、葉の脈状に徳利上の小さい虫こぼを見つけた。調べてみると、ケヤキヒトスジワタフシで六月下旬孔をあけて脱出すると。ことしは、うかつで花も実も見ずじまい。三者の比較を願っていたが。畳の斜面や肩に位置するケヤキは、その太さの測定に難儀した。三十余年前に測った時は若く、助手の子らも小学生で冒険は好むところと用意にできたのに、でもガンバって、分布図をつくることができた。助手は古川あい女史。市の副木としてケヤキを推したい。いまでは各都市とも街路樹として植栽しているが、広い路に限りた。



イチョウと共に、早くから色づき始めたケヤキ
(11月7日撮影)

2. 公園の紅葉「豊橋公園の自然」（p. 35）

イロハモミジの紅葉は十二月十日ごろがよい。ややちぢれているが、逆行の位置から見上げると鮮やかな紅色となって目にしみる。ほとんど内壕に面した斜面に多く、富安風先生の句碑付近のがよく色づく。

エノキは黄緑色ケヤキは赤葉、イヌビワは黄色い葉、ナンキンハゼやイチョウも同じころ色変わりする。

3. 公園散歩「豊橋公園の自然」（恒川敏雄著：昭和58年発行）（p. 56）

（この項は「山本一郎氏」の筆による。）

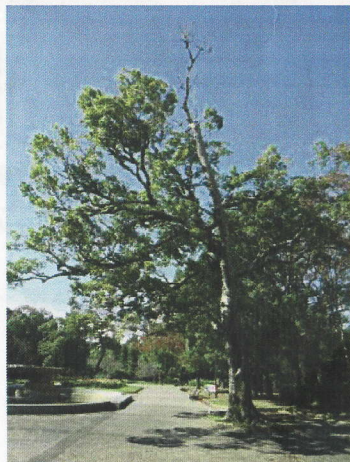
健康の基は歩くことであるとの信念で豊橋公園を散歩し、築城当時から歩兵第十八連隊所在時代を思索しながら歩く。ありがたいことに歩くことが心身の鍛錬ともなり、また樹木の四季の移り変わりや豊川の流水や、遠い山々の景色をながめると心の安らぎを覚えます。

豊橋公園は常緑のタブ型の森であるが、それにも勝るとも劣らないのは落葉広葉樹(ケヤキ、ムク、エノキ)の存在である。大樹下には小低木が散在し森の茂みを加えている。落葉性の小低木にはムラサキシキブ、イヌビワ(ホソバ型の変種もある)、マユミ、マルバウツギ、ゴマキなどがある。

エノキはムクに比べるとやや少ないが、豊川沿いの地にはエノキが断然多い。公園内では、城下橋近くの朝倉川にそった地に小群落をみる。総本数約六十。三メートル以上は一本。特色としてヤドリギが着生しやすい。樹形上の特色では梢が比較的太めで稲妻形をしている。樹皮は黒汚色を呈し剥離し難くザラザラした触感。たくましい男性的な大樹である。キツタやテイカが付着しやすい。花期は一番早いようで四月中旬に開花する。葉には上半分に鋸歯がある。

ムクノキはエノキより多く約九十余。三メートル以上が三本。体育館の西に多い。樹形は傘状にしだれる。樹皮は、やや赤みを帯びタテに長くはがれる。

ケヤキは全域に分布する。太く高く拡張の高い木。本市の木としても恥ずかしくない。有用材の王。形態上の特色としては梢は細かく立ち、芽出しが美。ハダは白みを感じ、皮は丸くはがれて生長肥大する。葉の鋸歯は波形。園内や街路樹として多植。他の高木はアキニレ。



おなじみ
美術館前のエノキ

2011年 定例自然観察会

都市公園の自然 ～豊橋公園の30年



散策する人もまばらな、静かな秋の豊橋公園

(11月7日撮影)

第5回 (11月13日)
主催: NPO法人東三河自然観察会



NPO法人

東三河自然観察会

四季歩き弧状の史実夢にみる

虫の音や昔を偲ぶ松の月

私の好きな言葉は「歩々是道」「温故知新」「天地人融合」などで、その意味をかみしめながら歩くと、今橋城築城以来の歴史が頭に浮かび、昔の人の生き長らえることの難儀さと、現代人の安心幸福の生活が深く教えられます。

学童に古城の話冬ぬくし

公園内にそびえたつ老木の大樹の樹齢を考え、場内歴史の変遷を思うと、現存する老木は大自然の恵みと人々の愛護があったからで、豊橋公園、誇りの樹木として後世まで大切に残さねばなりません。

幾百年歴史秘めしや冬侘し

公園内はいろいろな新しい施設で狭くなり、庭師さん、植木屋さんの指導で同種の木を密植したり、四角な舗道で老木の根元まで包んで、近代的建築物とは好対照かも知れませんが、歴史ある公園では不適當で公園の品位が低下すると思います。公園内を散策する老人や婦人たちが、ゴミを拾っていく姿を時々見かけます。そうした暖かい心こそ公園を守護するものであります。

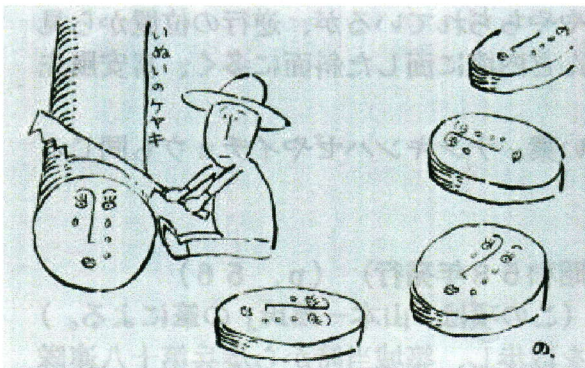
霜白し芥の点々追う婦人

4. ケヤキ物語「豊橋公園の自然」(p. 53) (この項は「野口氏」の筆による。絵も。)

晩秋、タブ、クス、カゴ、ヤブツバキなどの常緑に交じって落ち葉のケヤキ、エノキ、ムクノキの樹相がすばらしい。かぜに舞いちる枯れ葉、風格のある樹幹、細い網脈のようにひろがる梢。それは美術館に飾られる人間の芸術作品に勝る美しさを持っています。しかも、二百年、三百年をかけてつくり上げた木魂の造物、市民の宝として、いつまでも守り育てていきたいものです。

昭和三十三年、吉田大橋架橋のため、旧吉田城のイヌイ(北西)の方位にあったケヤキの大樹が、切るか残すかで、建設省と豊橋文化財委員の間で論議されて、結局、切ることになり、天然記念物指定が解除され、今は国道下にねむっています。

たまたまそのころ、市内で上映されていたのがフランスの女流作家サガンの「悲しみよ今日は」でした。さっそく、そのタイトルとポスターのイラストを拝借して、本紙上に描いたのがこの漫画です。そしてこのケヤキは、金二十九万三千五百六十円也で落札、根元の太い部分を輪切りにして、保存することになりました。その年輪は、四百年以上の星霜を重ねていました。四百年前といえば、吉田城は、かの長篠戦役に活躍した酒井忠次の時代でした。続いて、豊城中学校校庭の真ん中にあったケヤキも切られ、その根幹が現在、新市庁舎一階に展示してあります。



イヌイのケヤキの涙



豊城中学校校庭にあったケヤキの根
今は、市役所地下2階に展示してある。